

テレビディレクター 三十五年

門 目 省 吾

私の選択

私は、一九九三年、五十七才でNHKを退職し、翌年、現在の有限会社「エイ・エフ プロデューズ」を設立した。NHKの職員制度では、この時、五十七才から六十才までが、定年退職期間とされており、私の場合は、定年まで、三年間の猶予があった。仕事が嫌になったから辞めた訳ではない。映像制作への尽きない興味と関心は変わりがなかった。放送を含めて、映像制作とは、一つの視点から現代を切り取る作業である。現代の文化状況からすれば、NHKという組織を離れても、そのことは可能であると判断したからであり、できるだけこの仕事を続けたいと考えたからである。

エイ・エフ プロデューズの由来は、こうである。エイは、AGRICULTUREのA、エフは、FISHERYのFである。農林水産業に関連した映像制作を続けようという願いを込めて名付けたものである。私は、NHK生活の殆どの期間、農林水産業関連の産業経済番組の企画、制作に当たってきた。第二の人生で、社会に貢献できる仕事を探すとすれば、私の能力からするならば、あまり選択の幅は広くはなかったといえる。

現在、産業・経済関係のビデオパックやイベントの企画・制作、開発途上国のテレビ局のディレクターの研修などを仕事にしている。

N H K 青森局

N H K に職を得たのは、一九五八年十月。N H K 青森放送局放送部が初めての仕事場であった。日本の経済は、当時高度成長の前夜であり、就職難であった。哲学を学んでいた私も、ご多分に漏れず卒業しても仕事はなかった。夏休みが終わるまでの半年間は、私立の高校でアルバイトをしながら、仕事を探していた。人生には、思いもかけぬところから道が開けることがある。やはり、就職浪人中の友人 B が N H K から求人が来ているらしいという情報を持ってきてくれた。余り乗り気がしない私を急ぎ立てるようにして、B は、書類を取りそろえてくれた。N H K では、教育テレビの開設のために、この年と翌年に、中途採用で人員の補充を行ったのである。この時には、そんなことは知る由もなく、私と B は、試験を受けるために青森の N H K に行った。その帰り道、B と話してみると、どう考えても B の方が良くできたらしい事が分かった。誘ってくれたのも B であつたしと私は半ばあきらめていたが、結果は私だけがパスしてしまった。B とは一時、気まづくなつてしまったが、その後も私たちは、良い友人関係が続いている。ながい目でみると B にとっては、この事が幸いしたのである。B は、その後、弘前大学の教授となり、つい先日、定年を迎えた。

それはともかく、私は以来八年間、ディレクターとして青森県を舞台に、主として農林漁業に関連したラジオ、テレビの番組の企画・制作にあつた。学校での専攻は哲学であり、産業や経済に関しては、全くの素人であつたが、当時の青森県は第一次産業以外に話題になるものはなかつたし、第一次産業の現状を知らないでは、社会を語ることもできなかった。農業関係の団体や県庁などの行政機関に就職した同級生からはいろいろと教えてもらった事柄は多く、私にとって、青森での八年間は、放送制作のための技術と第一次産業に関する知識を習得する期間であつた。

東京では、六〇年安保の大きなうねりが始まっていった。その頃青森は遠かったが、時代の動きは、農村にその兆しが見え始めていた。牛や馬を使っていた農作業が、機械に変わろうとしていた。田舎館村に耕耘機（ハンドトラクター）が入ったことが大きなニュースであった。国では「農林漁業基本問題調査会」を設けて、戦後の復興の後を受けて、これからの第一次産業の在り方が様々に議論されていた。青森県でも、これを受けて、調査会が作られ、青森県の農業や漁業の在り方が活発に議論され始めていた。私も所属していた青森農政ジャーナリストの会でも、その事が話題となって何度か研究会が持たれたりしていた。その研究会の席上でのある先輩の言葉が、今でも心に残っている。その先輩は「テレビが農村を変える」といった。その先輩は青森県庁の課長で、農業番組では、よく出演していた方である。はじめ、農業番組のことをいっているのかと思つて良く聞いてみるとそうではなかった。テレビが家庭に入った事自体が大きな出来事だというのである。遠くに旅行したことのない人でも、これまでみたこともない世界のあることを知る。ニュースで、銀座のファッションを見る事ができ、ドラマで都会の中流家庭の暮らし方を知る。この事が農家の意識を変え、暮らし方を変えていくのだ、と語つたものである。その後の農村の変貌ぶりを予見するような話であった。

N H K 放送センター

一九六六年六月、東京のN H K放送センターに転勤。ディレクターとして、番組の企画・制作に当たることになるが、青森での仕事の実績がベースとなつて、産業・経済関連の放送を担当することになる。その頃、ラジオの「早起鳥」、テレビの「明るい農村」、教育テレビの「農業教室」など、農業番組の全盛時代であった。中でも、テレビ番組「明るい漁村」の開発に参加したことから、ライブ

ワークとしての私の現在の仕事の領域が形成されてきた。

NHKには、八〇年代まで、農林水産業の領域を専門に担当する一つの部があった。九〇年代には、産業部門として継続され、デーリーの番組を放送していた。放送の内容で見ると、六〇年代までは、農業の技術指導を含めた農村や農業関係者に向けての放送。七〇年代以降は、農業・農村を素材にした一般向けの放送であった。私の関心も、産業としての農業から、食料問題へと移っていった。

青森局時代には、ローカル放送が中心であった。一年に何度か全国向けの放送に取り組むとき、力のいれ方が違っていた。しかし、東京で作る番組は、殆ど毎日が全国向けである。そして、毎朝ミーティングがあり、その朝の放送に関して厳しい指摘が飛んでくる。緊張の連続であった。しかし、その中で専門性も鍛えられた。一つ、ひとつの番組は、ヒット作品でなくても思い出がある。

初めての海外取材は、太平洋であった。日本から遠くはなれ、ハワイ沖から太平洋上をアメリカの沿岸にまで展開する遠洋マグロ漁船のドキュメンタリーであった。半年もの間、日本を離れて働く漁船員と減少を続けるマグロ資源がテーマ。もくもくと働く漁船員たちの思いをひきだすためには、一つの状況設定が欠かせなかった。私たち取材クルーは、それを一本のビデオに託した。漁船員たちの家族の声の便りをVTRに収録して船に持ち込んだのである。彼等がそれを見ているところをVTRに収めた。懐かしい顔、懐かしい声に、海の男の顔がゆがむ。労働のときには見せない彼等のもう一つの顔が現れた。このシーンが、見ている人々の心を揺さぶったのである。これは、NHK特集として翌年の春に放送されたが、沢山の反響が寄せられた。ある学校の先生は、教材として教室でVTRとして見せたという手紙と一緒に生徒たちからの感想文が山のように送られてきた。太平洋の真ん中で巨大なマグロをとる珍しさよりも、漁船員たちの厳しい労働、家族からのVTRを見る漁船員たちのシーンに関するものが多かった。「マグロ捕る人達は、夜、ねむくないのだろうか」「帰ってこれ

ないおとうさんに会えない子供が可愛そうだ」など、更に、都会の主婦からは、「あんなに苦勞してとつてくるマグロを粗末にはできない」ともいつてきた。漁船員たちの思いは確かに伝わった、と思つた。

N H K 仙台局

一九八八年七月、仙台局に転勤。ここでも、三年間、農業番組の仕事が待つていた。この時期、ガット・ウルグアイラウンドが、最終局面を迎えていた。問題は、コメを何時自由化するかにしぼり込まれていた。農業地帯である東北では、特にアメリカから、安いコメが入ってくると、農家の経営は立ち行かなくなると、農業団体は必死であつた。従つて、番組も、国際化時代の日本農業、日本人と食生活に関連したものが多くなつていった。中でも、シリーズ「東北・ふるさとの食事」、長時間討論「どうする日本農業」は、思い出多い放送であつた。

「東北・ふるさとの食事」は、津軽の「かいの汁」、岩手の「まめしとき」、宮城の「ずんだもち」、秋田の「だまこもち」など、東北の農村に伝わる伝統食を、地域の風物と共に構成したもので、風土の中で生きてきた人間と、そこで生まれ、伝えられてきた食生活を文化として伝えていくことの大切さを描いたものである。そこには、今日の日常生活とは全く違つた時間があつた。奥会津の雪深い山里を訪ねたとき、今は亡くなつたお婆さんが、この家にお嫁にきたとき、持つてきたという桐のタンスが今でも使われていた。また、庭先に二メートル程積もつた雪の上に、一メートル程、三本の細い木の枝が覗いていた。これは、このいえに女の子が生まれたときに植えたものだという。「この子がお嫁に行くときに、一本は、結婚式の費用に、一本は、タンスの材料に、そしてもう一本は、生まれ

てくる子供のために役立てるためのものだ」と説明してくれた。その女の子は、知るか知らずか、すっかり雪に埋もれてしまった屋根から、真っ赤なホッペでソリ滑りをしてはしゃいでいた。すぐに結果を求めるのではなく、二十年、三十年先の実りを期待しながら、もくもくと生きている暮らしを発見した思いであった。

再び、東京へ

一九九一年、再び東京のNHK放送センターへ。この時、農林水産関係のセクションは、産業・経済班に模様替えされていた。農業関係の放送も、自由化と同時に農産物の安全性が大きなテーマになってきていた。九二年、東京で開かれた国際農業経済学会でも、この事が大きなテーマとして取り上げられた。食糧の飛躍的な増産をもたらした化学肥料と農薬依存の近代農法が、農産物の安全性を損なっているのではないかという指摘が、農業関係者の間からも問題とされ、二十一世紀の人口爆発に備えて、「もう一つの農法」(ALTERNATIVE AGRICULTURE)が課題となった時期である。地球に優しい農業、環境に優しい農業をテーマに、ドイツの農業の紹介やドイツの農家を日本に招いてのシンポジウムの開催などの企画・制作に当たった。日本経済の高度成長は、農業や漁業の姿をすっかり変えていた。地域社会の中で生業として、長いスパンの中での暮らし方が困難になってきた。農業もまた、経済優先の仕組みの中に組み込まれ、生産第一主義の産業へと進んでいた。効率の悪い部分は切り捨てられ、外国からの安い農産物に取って変わられた。国際化が進む中で、自由貿易優先という考えが支配的である。食糧までも安いものは外国から買えばいいとばかりに、自給率は下がればなしで、穀物に至っては、三〇パーセントをきるまでになってしまった。そして、日本への農産物の最

大の輸出国はアメリカであり、利益を得ているのは、多国籍企業であるアグリビジネスなのである。二十一世紀の人口爆発と食糧の逼迫が予測される今、食糧生産を国際的な分業とすることの危険性を指摘しなければならぬ。九三年の冷害の時の国内の混乱は教訓として生かす必要がある。放棄された農地からは、すぐには、作物は収穫できないのだから。テレビは、こうした情報をいま伝えなければならぬと考える。しかし、私がNHKを退職して一ヶ月あまりして、NHKの番組表からは、産業・経済のレギュラー番組は姿を消した。

私にとってのテレビとは――

日本人の、平均的テレビ視聴時間は、一日に約三時間。この十年間殆ど変わっていない。テレビは今や水や空気と同じ様な存在になつてきている。いわばある種の生活環境であり、活字文化とは、全く異なつた影響を人々に与えている。極論すれば、意識的に何かを見ようとすることはなくとも、見えてしまうという側面がある。私がテレビ番組を作り始めの頃、青森県の課長の言葉を思い出す。知らない世界が家の中に飛び込んでくるのである。しかも、現在は、全日放送の時代である。衛星放送が、社会主義の崩壊を加速したという主張に根拠がないわけではない。テレビの電波に国境は無くなつた。閉鎖された社会主義社会に、資本主義国の物質的に豊かな姿が送り込まれた事が、変革へのインパクトになつたとは、想像に難くない。大衆への影響力は活字の比ではない。パリのファッションが、たちまち世界中に広がる。チェチェンの戦鬪が、クリントンの演説が、中東のテロが、その日のうちに世界中で知るところとなる。世界中に秘密がなくなつてしまつたといつてもいい。

勿論、これは、プラスの面ばかりではない。同時に苦勞して、本物に出会い感動する機会も失つて

しまったのである。それは、あくまでも、疑似体験の世界であり、制作者によって切り取られた現実であって、事実ではない。テレビ局あるいは放送会社から提供された物でしかない。あくまでも創り物の世界であることを忘れてはならない。エレクトロニクスの世界の進歩は、様々な映像を作り出すことができるだけではない。テレビは創作であるという言葉がピッタリする時代になってきたといいたい程である。

NHKのディレクターが、一本の番組を作るときの標準的なシステムを紹介しておこう。

1. 企画を作る：新聞、雑誌、電話取材などで情報を収集し、仮のテーマを決め、集めた情報から何を訴えるかを明確にし、企画提案表を作成する。
2. 企画提案会議：グループで、企画提案表を基に検討を加え、採否を決める
3. 構成を考える：番組のシーンを考えながら、素材を並べてみる。
4. VTRロケ：構成を基に、ロケーションを行う。構成に無かったものでも企画の意図に沿ったものがあれば、VTRに収録しておく。

(ディレクターは、カメラマンに、撮影の意図を伝え、作業に協力する)

5. ラッシュの試写：VTRに収録した全部を通して観る。

6. 構成の検討：試写を基に、もう一度構成を考える。

7. VTRの編集：構成にもとづいて、編集作業を進める。

(編集の専門家が行う場合とディレクターが行う場合とある)

8. 放送台本の作成：編集されたVTRに合わせて、ナレーションの長さを決め、効果音や音楽のいれ方を指定する。

9. 効果音・音楽の打ち合わせ (効果音、音楽の専門家に依頼)

10. ナレーション打ち合わせ（主としてアナウンサー）

11. スタジオ作業：生放送或いは録画（スタジオの器材操作はエンジニアが行う）

こう見てくると、それぞれの段階で、ディレクターを始めとして、制作者の意図が色濃く反映されていく。事実から様々な要素を抜き出して組み立てていく作品であり、それは紛れもなく、創作である。十人のディレクターがいれば、十本の作品ができる。

一方で、VTRの技術の進歩は、テレビ取材の方式や映像制作の方法を一変させた。素材としてフィルムを使っていた時代に比べて、撮影される素材の量は膨大なものになってきた。ブラウン管で送り出される映像は、ディレクターの意図するところに従って、その中からセレクトされる。通常の編集方式では、三十分の一秒まで、選択できる。ディレクターによって選択する映像は変わってくるのが当然である。ディレクターは、何を伝えるべきかを判断し、同時に、事実を伝えるためには、どのような映像が必要なかを絶えず判断していく力量が求められる。

「やらせ」は、許されるのかと言う事が論争になったことがある。ある海外取材で、「人々は高山病に悩まされる」と言う事柄を表現しようとして、スタッフの一人を、病気になったように仕立てて、撮影した。と言う事が問題にされた。確かにこのこと自体は許容範囲をこえているだろう。しかし、この「やらせ」と「状況設定」とは、全く別のものだと私は考える。自然状態のままを撮影するだけでは、テレビの番組は作成できないのである。前に記したが、遠洋マグロ漁船の取材に際して、留守家族のビデオを漁船に持ち込んだのは、漁船員の心情を引き出すための状況をこちらでつくったのである。

また、「仙台空襲」という番組を作ったとき、主人公Yさんのインタービューを撮るために、かつてそこに自宅があり、空襲で家も全焼、家族も失った現場まで出かけていただいた。何十年ぶりで、

その現場にたつて、Yさんは、「ここに防空壕があつたが、夫はこんな格好で死んでいた。子供はここに倒れていた」と、つい昨日のこのように語り出した。スタジオの中のインタerviewでは、この様な語り口は出てこない。状況を設定することの大切さである。

「農業特集」の長時間討論を録画した時の事である。こちらが設定した台本にしたがつて、筋書き通りに討論がすすんだ。司会者が締めくくりの挨拶をして番組は終わった。こちらが終わったと考えたのである。ところが、気がつくともスタジオのなかでまた議論を始めていた。本音を出し合つて、かなり激しくやり合つている。一度止めたVTRをもう一度回した。放送が終わつたと言う開放感からか、伸び伸びした表情で、面白い議論している。出席者にご了解を頂いた上で、その部分も放送させていだいた。この場合、録画が終わつたときに、討論のための「状況設定」ができたのかもしれない。討論は打ち合わせをするとも面白くないという。しかし、テーマによつては、綿密な打ち合わせが必要なきもある。人間は、信頼関係があつて、はじめて安心して話ができるだということを教えられた場面であつた。

放送労働者として

冒頭に、「テレビディレクター三十五年」と書いたが、実は、その内の六年間は労働組合の専従役員であつた。一九七一年からの六年間である。NHKの番組を作る仕事は充実にしていた。不満があつたわけではない。ただ、十年もするとNHKの中がよく見えてきた。初めての東京暮らし、東京の仕事場。青森とは別の世界であつた。番組の作り方にまず戸惑いを感じた。職場には、すでにIBMのコンピュータシステムが入り、番組制作の管理が始まつていた。ラジオの生放送のためにディレク

ターが原稿とレコードを準備してスタジオに行く、そこには、エンジニアとアナウンサーが待っている。いずれも初対面の人達である。挨拶をして、本番通りのテスト。そして、放送。終わると、「おつかれさま」といってそれぞれの職場に帰っていく。ディレクターは、一本の番組を作るためのスケジュールを作る。ロケーションが入る場合には、自分で旅費の伝票を書き、カメラマン、カメラなどの撮影器材、効果マン、アナウンサー、編集室、スタジオ、エンジニアのスケジュールをもらう。その前にロケーションの現場の都合も聞いて、協力を依頼する。その当時、局内のスタッフをコンピュータを使ったスケジュール管理では、器材と同様にリソースと呼んでいた。そう呼ばれる人々からは、「俺たちは物なのか」と当然の反発があった。制作の過程が、この様に機械化される一方、ディレクターの仕事には、極めて職人的な所が残されていた。徒弟社会であり、残業は日常的であった。しかし、一方では、時間外労働については、労働組合との協定があるために、現場の管理者は一定の時間になると残業しても、記録しないように指示していた。東京・内幸町のNHK放送会館の横の路地には、午前二時になっても、タクシーが列を成していたのは有名な話である。メーデーにも、私のいた職場では、黙々と仕事をしていた。

私が東京に転勤したとき、松山からはAが、松江からはFが同時に同じ職場に赴任した。三人とも、地方の大学出身の言ってみればお上りさんであった。AもFも東京のやり方はどこかおかしいと考えていることが分かり、仕事の面白さにのめり込むのはいいとしても、健康管理は自分がやらなければならぬ筈だと、職場の中の組合作りが始まった。東京に長くいるディレクターからは、あからさまに白い目で見られたが、組合が職場の中で普通に語られるようにはなった。最近、過労死が問題になるが、労働者の権利は、労働者自身が守るほかに道はないのだと言う事を痛感する。賃上げと同時に、過労死という事故が起こる前に、日常的な労働環境を監視していくのは、労働組合の任務ではないの

かと思えてならない。

私が、NHKの労働組合である日本放送労働組合に執行部として関わったのは、一九六〇年代から七〇年代にかけてである。前半は職場の分会長として、後半は、中央執行委員、副委員長、特別中央執行委員としての関わりである。当時の組合・日放労の運動は、賃金問題などの処遇改善、制作条件・労働条件・就業規則・企業年金・男女格差是正などの制度問題、言論の自由と大きく三つの柱を掲げていた。

当時は、総評の太田・岩井執行部が編み出した春闘方式が定着し、私鉄総連や国鉄労組、全電通、全通などの公共企業体の労組が運動をリードしていた。この中で日放労は、独自の賃金論を掲げて賃金闘争を闘った。ノーマルベース賃金論である。それは、私たちの日常の労働の対価として当然支払われるべき賃金と規定した。子供が二人、奥さんはアルバイトなしで、普通の暮らしをして、二人の子供は、大学に入れるとして定年退職までに幾らかかるのかを試算した。さらに、NHK職員の平均的なライフサイクルを作り、専門委員会を作つて年齢別の賃金を毎年計算したのである。毎日の食費、被服費、交際費などなど、組合員の家計簿を参考にしながら積み上げていった。数字は現実の賃金の倍ほどにも達した。その差を私たちは、資本主義社会の体制の中で力の差と考えた。労働者が主人公になる社会では当然貰える値と考えたわけである。当時トヨタが、パブリカという大衆用の小型車を売り出した時である。月賦でもいいから、これを買うことにしよう、ノーマルベースの中に組み込んだ記憶も懐かしい。その値がそのまま、春闘の要求になったわけではない。総評傘下の民間産業組合の一員として、春闘のレベルを睨みながら、要求額を決めていった。

一週の労働時間四十三時間は、かなり早い時期に実現し、週休二日制に付いては、七〇年代から他の労組との間で「週休二日制セミナー」という形で取組を進めていた。企業年金を制度化するについ

てもNHK当局からの提案に対し、組合として様々な問題点を指摘しながら、改善の取組を進めた。私たちは、放送に関わる労働者として、ディレクターやアナウンサーだけではなく、エンジニアも受信料の集金を担当する営業マンも、庶務も車の運転手もNHKで働く者はすべて放送労働者として、国民のための放送を目指す取組を進めた。現在も続いている「月刊・マスコミ市民」は、この運動の機関誌として創刊されたものである。一九六〇年、熱海で開かれた第一回放送研究会の印象は鮮明であった。NHKだけではなく、全国の民間放送の制作者たちが、一同に集まり、現場での取組が紹介された。日米安保体制の中で、政治はテレビを権力の道具として利用しようとして現場に様々な介入してきた時期である。その後、日放労と全国の民間放送の労働組合で結成する民放労連は、放送労働組合協議会を結成して隔年にこの研究集会を続けることになる。

言論の自由を守る闘いは、具体的であった。NHKの財源はほとんどが視聴者からの受信料で賄われているが、予算は国会にかけられる。国会に修正権はないが、衆・参両院の通信委員会で審議された上で本会議で可決されなければならない。

自民党の長期単独政権の中では、様々な形で放送に介入してくる。国民のための放送を目指す私たちは、国会の中に私たちの発言の場を作ろうとして取り組んだのが、日放労委員長の上田 哲を擁立した参議院選挙であった。わずか一万五千の労組が、「放送を国民のものに」を掲げて、全国的な取り組みを行い、百万票を勝ち取った。放送の危機を訴える私たちの運動の正当性が国民的に認知されたものとして評価されて良い。選挙は綺麗事では済まない。組合員から拠出金を募り、組合書記局のなかに、専従者をおいて取り組み、全国的に「放送の自由を守る」運動を拡大していったのである。組合員の中には、自民党员も共産党员もおり、社会党からの立候補と言う事で異論がないわけではなかったが、運動として克服されたと考えている。

放送制度論についての取組も記録しておかなければならない。現在もそうであるが日本は公共放送のNHKと商業放送会社の二本立てである。国民のための放送を文化として確立するには、どの様な制度がよいのか。中央執行部のなかに専門委員会を置いて、検討を続けた。「国民放送論委員会」とよんだ。稲葉三千男東大新聞研究所教授（当時）、奥平康弘東大法学部教授（当時）、正村公宏専修大学経済学部教授（当時）新井直之創価大学教授（当時）など、専門家と組合の専門委員が議論しながら、放送制度の在り方に付いて問題点を洗い出していった。

専従役員としての最後の仕事は、「放送白書運動」と「日放労史」の編纂である。放送白書は、いわば組合としての職場点検である。放送に関連するすべての職場から仕事の進め方、日常の管理の在り方、業務の運営が民主的であるかどうか、など、職場で議論したものをレポートとして提出してもらい、それを基に中央執行部で項目別に集大成したものである。このレポートは、当時上田委員長と一緒に記者会見し、内容を公表したが、放送の内側を克明に点検しただけではなく、外部に公表したことは画期的と評価され、朝日新聞は、大きく紙面を割いてくれ、私もインターヴューをうけ、記事となった。

組合専従最後の二年間は、殆どの時間を日放労史編纂のための資料収集のために当てた。現在の日放労の前身の設立に当った人々にも会い、残された資料を裏付けることができた。社会の変貌とともに、労働組合も変わった。設立当時から八〇年代までの活動の記録は、今や歴史となった。

私のテレビディレクター三十五年。それは、労働組合との深い関わりの中の三十五年であった。組合運動の中で感性も磨かれ、番組制作に関わる姿勢も鍛えられていった。放送業界が巨大化し、チャンネル同士が視聴率競争にしのぎを削り、番組制作から時間も手間も抜いて、安く上げようとすると、TBS事件は、どこで起きてもおかしくない状況にある。地上波から、衛星放送、通信衛星のチ

チャンネル、CATVとチャンネルのひろがりは加速されていく。しかし、その波に乗せる内容・番組の制作が追いつかない。制作の専門家であるディレクターの養成も充分には行われてはいない。自主制作よりも他から出来たものを買うほうが安いからである。NHKでも、自主制作がどんどん減っており、衛星放送の場合には、四割が外注という数字もある。外部の優れた人材に電波を開放するという意味合いを否定するものではないが、番組は、創造的なものだけに、明確な責任体制が必要だと考えるのである。

私たちは、放送局で働らく労働者をすべて放送労働者と位置づけ、放送を権力の道具としてではなく、国民の為の文化として確立しようと試みてきた。

二十一世紀へ、新たな時代の潮流の中で、今こそ放送労働者自身の感性を研くことが求められている。